根源
みちの
十一編

柳亭果著
梅蹊楼
國貞画

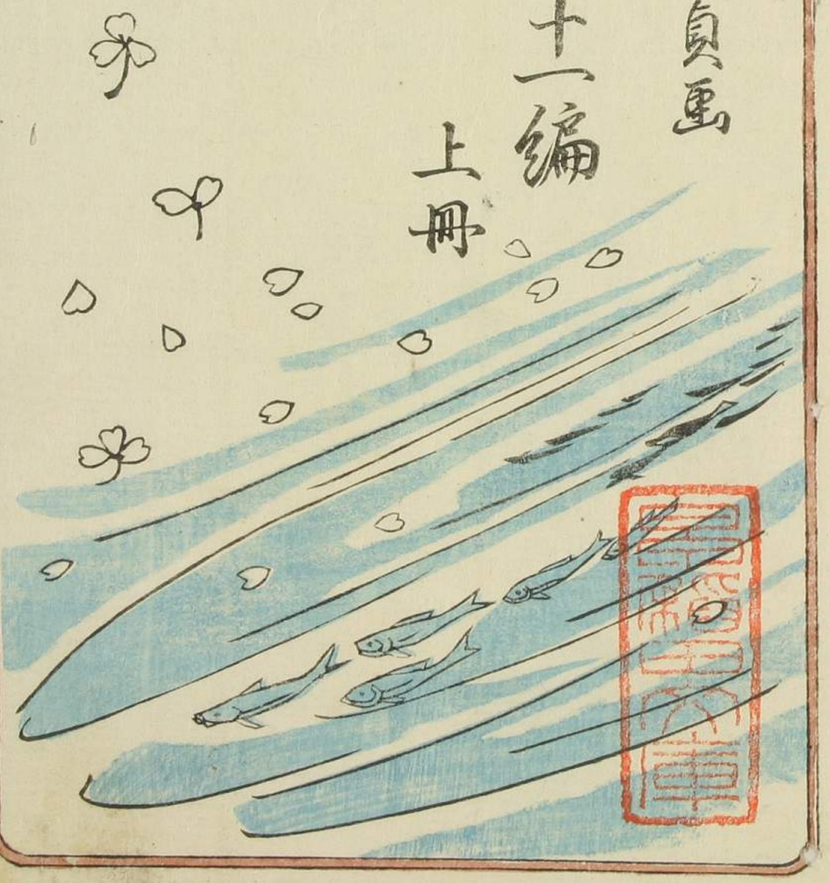
へ13
3050
6

仙果作 國貞画

實説十一編

上冊

畫の類ハ
板多兒ゲ
頭噴ル
図も



へ13 特
3050
6

桜源
十一編上
実年産
嫁書
仙果化
十一編下
国貞画
作題曲亭馬琴

笑ひ草

浦の栄

十一編巻冊

仙果著
國貞畫
喜鶴堂梓

此一篇の尾張にて草せし史舌人の頑しく某といふ朋友の稿本を見て嘲ぶるハ
接手子が女中に調弄るハ妹背山の御殿場を宜孝統紫に赴き紫式部が
画賛さるあくろハ石魂録の面影より藍より出て水浅葱染返しハ紫ゆし
也一言に遺籠くろ説得是了然云ハ無理ゆもあくねど五百羅漢の其
中に必親に倣と顔のあるに比べく年々歳々著述数十部に及ぶもども
他のゆも自のゆも肖るものくそくそかるべ扱足下ハ此二ツを難じて未似くる
事を本編に綴くるを尤もなハくろ何ぞと云ふ接手子と式部に踊の所望
画賛の跳田畔の池に庭の泉水事こそ異き入水の覺悟又ハ冬く遇ね父
名告くるも二度ゆそ是とても蒙求の史事に倣ぶそもあくぶ金聖難く
所謂正犯るどの文法を博識めかして用くるゆも非ず都て余倉卒より錯て
實正ハ言句も出ずと自己ら我非を揚褄の使女ら言辞より起筆す

五　安政五年午孟春新刻　柳々老人仙果

葉の茂きへ
ちびくろ柿の
木を見ル
伊勢物語
大和国宇智
郡の大領
書ふ

丹生使宣孝従類ホ大藏亂村ホ
凌轢せらるゝ寛和元年七月十三日
そ日本紀畧ヨ其由出ル
一条院天皇の御代の
事とそるハ
例の戯作
大和国宇智
郡の大領
大藏種村
種村
紫式部を
恋慕
一條の
根も
愚作

傍紫の
天式部
負智
盛粧を
照〻見る所

〈紫姐〻〉鏡を喫と手を嗜事
十二編み詳なり

形
老

馬

花
枝

國貞画　仙果作

つゞき

童

兵

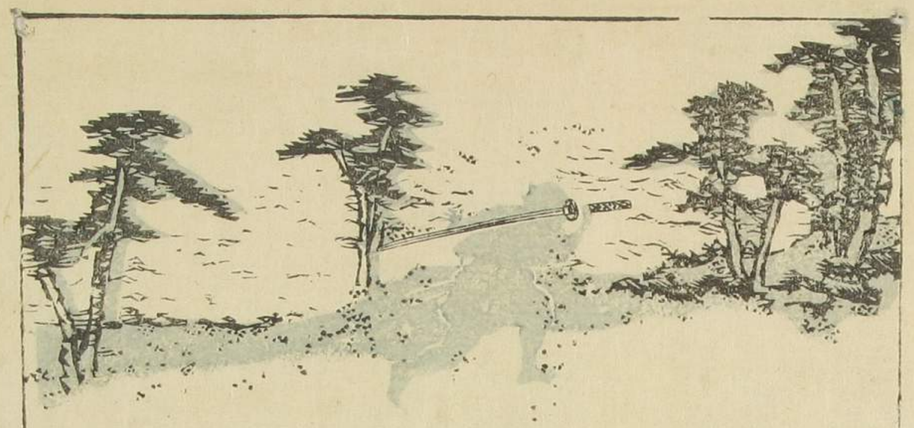
つゞき
紫
藍

兵

種

紙

仙果作　國貞画



あんげん　もくさく

根源實紫拾貳編上

國貞画圖

喜鶴堂版

晴明道摩が術競へ中古の草紙や粗載るを本編
ゑ些二夜寐の葦屋の里より　とゝ　術得授の誅殺を
勧ねどころ大が異名と威勢が薄く不共戴天の父の仇を嫡
身ごなくとぬゆく誹るのも義知の幕内で見の心見負を
布ゆも梅と蝶を号ゑよろく花兄の亜を寄頼ゆ夢の
ゆうる筋ゆ二ハ神々為場まで続らるきこゝも
甘ゆ早編數も十三重緋袴と下ゑ着さ今様振の
紫式部が源氏を綴るゆ〜ハ五衣の五帙ゆ六帙
ゆそいくるべ〜

作者　笠亭仙果

国貞画
仙果作
十二編上
根源實もの佐喜
梓行
十二編下

みちのくぶり

柳亭 著
梅蝶 描

十二編下

嘉永 年 梅

本文ようそしゐ 十ぺんのようぐき
○うまこをうごかすことよびろけるへ
そもあれのぞとときぞうれ
あとありあまびあ〜ぐのぞん
「ぶろーむいことうりろ
そのろーいどまでも
ろくらんあくいろろらん
ろぞやへきろまと
よあいとこそもりろ
とものにトいろホ

あごろき
うやうもまろり
「ろくとの花さへ
ごぞんじとかても
まアろ
ぎあ

おひじやこさま
「いまさやんと
ろくよの
川のろ
やるく
ろと
ろあるへ
あるの
いさろ
火の
そまホへ
あくで
ぬぞひに
あくりの
えゆるが
あきあのあん
しつさりく
きろまと
さやホさち
「のうまも
あーも
ぎあうあん
「あんホよく
うごきます
「そのろさろ
まてて
「まやに
つぎへ

松嵜宣孝朝臣

此月より末四頁つゞく道摩が物語を

廿余年以前の事と今年三月下旬より六月ふいくる

つくも まあびてまぶあつかくうどごの
らうまんも是らのごとうのまくとまとてふコ
ちくあくびとのうくあーくいせらまーあ
あとるくあとふことをひとをふ用のてすへ
うふうけぬこそきらけびこのいたぐニタすあ
をひろくねともきこおくずちがりきの
のいえもどちよりのこのこふどきこふ
ニふくつるのあさうをうけくうのけりに
数りをよのぜでまどふくうたに者をさけ
ものこふあけるがまむーあもびきあうふ
ふうまえまあ者あくべるふすきうーあふ
かとのひもいまむーそのあげくうて
あざのきあやうけまくもかーときあの
ひけうそのまもあくーどそのまふ
みくるよういたくうぞやあれあきんう
あきあのつくやれあきんう
あくんとあーはまどー
ひるげもくびはまきだら
あまこばあさうふあよがも
しとこそもあうりーさ
うちうまきをつがうとて
ともわくくまでちくもあ
ふくしねうきしちまこ
ザーびきどう者ハ
あくうあそ
あーどおむうひ
あひまうき
ゑまびがちくうと

道

晴

麻手

葉

糸
山東作
貞重

三
糸

柳
糸

梯

種
兵

菫
紫
撫

目
野

月西
嶋
老
男

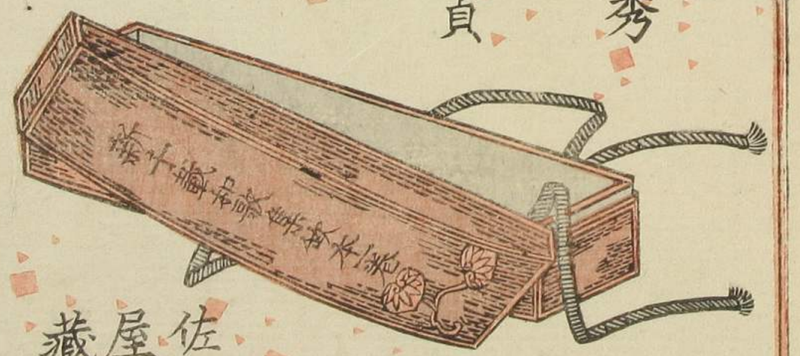
横
兵

根源實紫

第十三編上

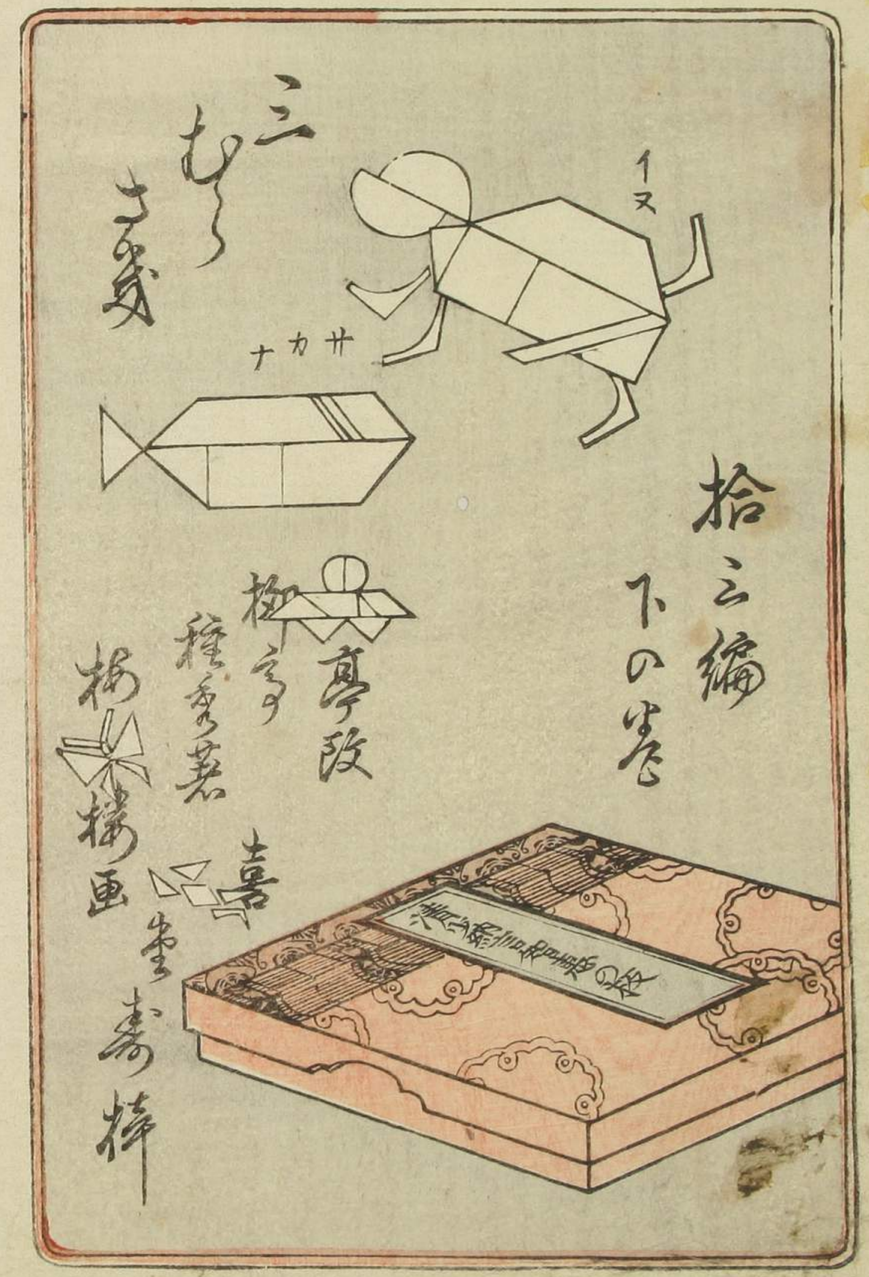
種秀 著

國貞 画



佐屋藏 埜板

松ぐも
実
雲雀
塔奇
十三編上
作題曲る一閑亭
種秀作
國貞画
春雀堂
壽梓
十三編下



とかたのあさ七丁ホのべきなるのもちるとどりあり
あゝねべめんさうるべらんホあらぶむそとも
皆岸山ハ萬葉集第十九の巻ホ大伴家持卿霍公鳥の聲を聽舊を感ぶに勝ぜ
ざて作る判官大伴の池主ホ贈られる歌ホて　當時家持々ハ越中ち和我勢故等
手携而　池ヘハ京ホ在られ　曉来者出立向暮去者振放見都追念鴨
見奈疑之山ホハ峯　ホ波霞多奈婢伎谿敝ホ波海石榴花咲宇良悲春之
過者霍公鳥伊也之伎喧奴　獨耳聞婆不怜毛云と有。此見奈疑之山
を名呼とゝ　秋萩見　部ち舉られど此外ホ古來咏る歌あること有
て館の邊りとゝ入るあるで宮地春樹とゝふ人の云ホハ此ハ山の名ホ非君と吾と国衙
近き山の陵や石海榴の咲るを觀て意を慰めるゝ其山とゝふ詞ホて山の名とあゝ
いゝ此説寔ホ宜ゝ見奈疑之の見ハ即觀望ち見。奈疑之ハ風波の和靜ゝを
いゝと同語ホて慰むとゝる憤怒の反對ホ　猶此巻ホ山振花を詠歌
上畧　折毛不折毛毎見情奈疑牟　繁山之谿敝ホ生流山振乎屋戸ホ引植而云又茅
十一の巻ホ　ゝやゝきくゝゝ表を　ゝゝ

紫式部
伊勢大輔清水ニ籠りて
紫式部と

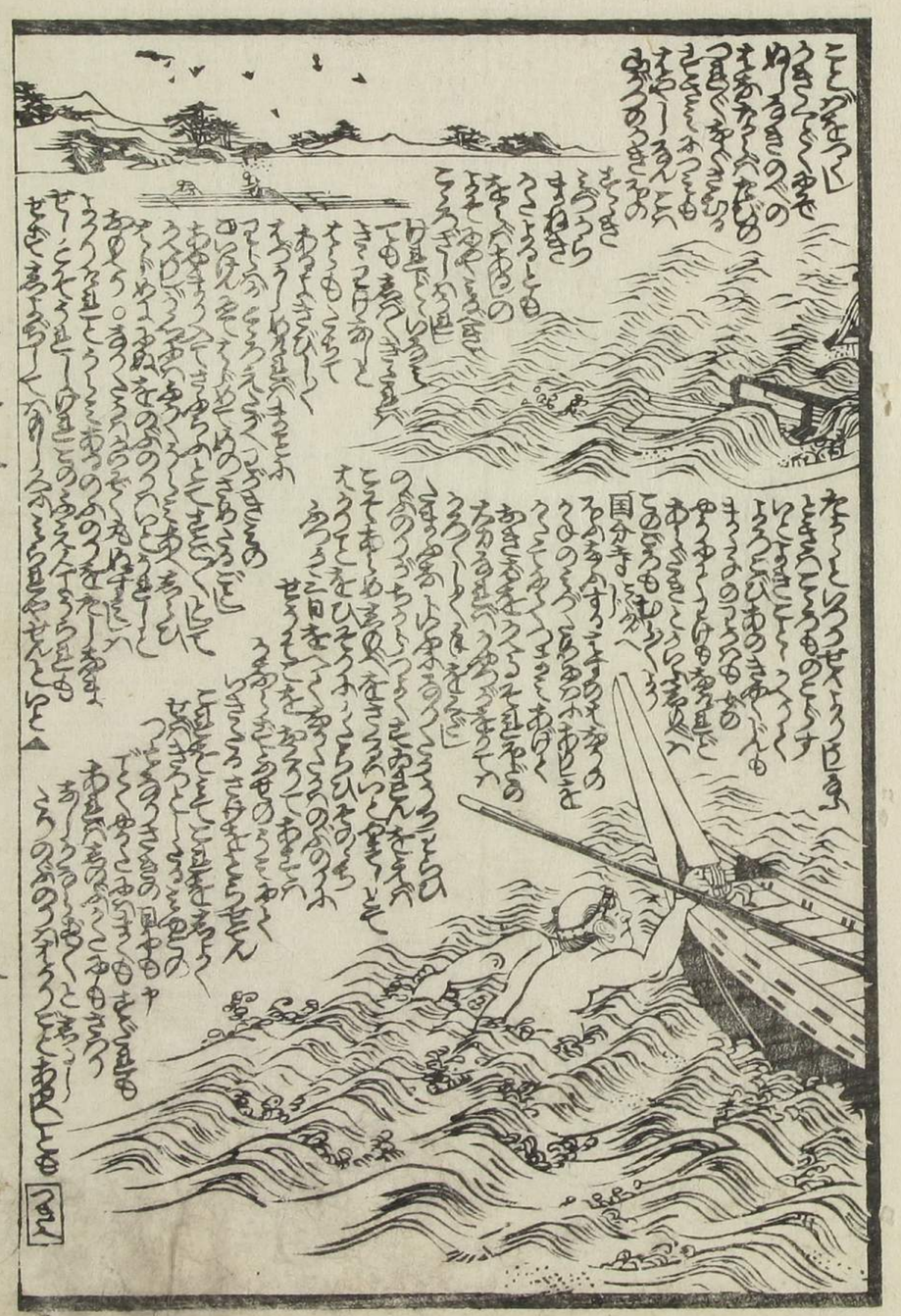
伊勢物がたり第七
十五段ハ大淀の濱ハ
てふみなどに心へあるべきなれども
それども是皆心の為ぐさむ由あり皆
岸と称ぐ山より此あたりハ在はとと惟規の云けるハ足ハ
有理本国ハ山多く立山富山礪波山室津山黒坂山石動山あれ数
あまたなれど皆岸とハ名とハ傍より波ぐ差出吾ら知らぬ霍公
鳥伊頭敷の山を呼越ん
山名と歌ハ前半ハ
歌よみ
ろもとう

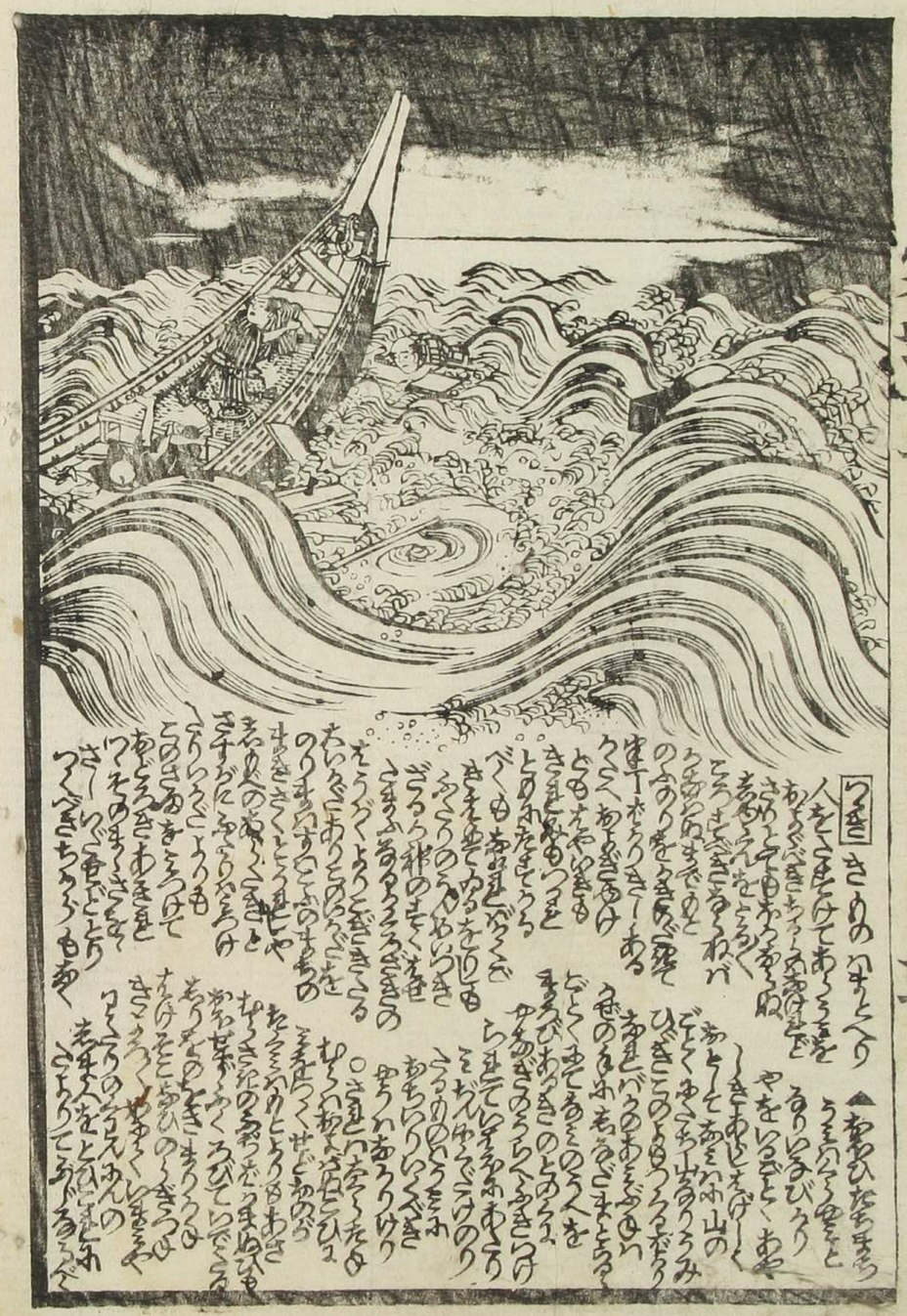
信孝松浦の旅館ホ家信を得る
紫式部
作しやゝかなゝの形の
故義のホ紙を
ふゝび用て
口巻の景色を

惟
茂
治

つぎ
たしかめてさいなまれ
ありふとんをかぶりこんまきあるる
のめまろく
やるく
やてやてやう
あるとわ
きさまと
おひしくふ
やい
ちやんを
でらんあそ
ばさべーと
あいさろ
ちくのち
そひを
くりくりく
さがるまこむひろひ
「さてを多よ
この女いそちの
くそさうあれ
前さのくらう
あやつろひ任はも
ちやこあるうのの
とんぶおーちんふ
かあくりどるきれと
きよねんのあめ
のりひろひて
とふくとよびて
国府のまちの
いるさのりまさ他の
▲弥次を
きくんとうそ
あしり山の
名とこ見も
かり又ばつこ出もろくえん
ゞぎこと見ゞ花おつけうろん
きでろるあるまちろりひり
さあいあくぎと
ある人のべんぎを
きくこと見おさあ
山の名こ
あるきと
あくくろう
きつぎ名見ゞ
雅
戸

あげこちいくあ
ごとくのんまちの
つ島くあの
ちくこくーひの
ごとくあり
ことこうあとうんず
だりあいとて
あそびをまのび
うてへさちつぎの
さうあのさいそくもり
ときこいつこうきこうくあど
よあびまつとあさーあきまき
ひどりこいよんちびるをうと
りのぶのりがうやつこちやまえ
のりとこーくありがあるこちやま
うーきをこうあ十ーあまあ
ちくくこうこーーとある
ちちあすまでかけあ
こをめちてまりぶのりあ
ありひをうけひとちーばあ
めとあーつあふをぐあ
ぶこひとのようこぶとを
りのぐうこ通ものくくあ
ありがあんとこひぐきこみい
ちちーーやきこうちりきこうち
ぶもこりこぐろくこまえる
判官就さあへべりのぐろう
ありこうこあとてかとーあちこ
ちいあくとこそ
「つぎへ」





種

細

実説十三
穂

花
梭
延

伯
員

賣卜並妙術傳
後

員
懐

櫛
糸
拍

西國奇談

春水補綴
國貞画

根源實紫新小説

作者 柳亭種秀

一編ハ工面次郎が姉計と聞くハ重桐又ハ伏さんとなると阿杉が忠義のりのゝうち工面次ハ管婚を促し冬く方便の裏を如れ暗ハ醜婦を娶るの一段話説かつく河童ゝめて残毒をさゝ含むの一帯 二編ハ水竜が浴室ハ虚井の守袋と云ふ夏目苦郎の計ハ秋風を敷くの一段譚て最巧みなり

十二編ハ秋風虚井毒手ハ終ハ非命ハ死なるより殺生石の一奇談つゝく龍太郎ハ仇みゝ此間ハ工面次ハ重桐らがうゝとも説くゝ引つゝくれ通ゝ當年の内ハ出板のもくゝ

十三編 惟規ハ北海の危難鳴高他を謀て自かつ天の網船拔手兒釣出す花園の遊宴ハ式部が画賛ハ呪詛の種村心の火性ハ浮氣の水性一者ハ妙術ハ醜婦忽ち美人と化る 十四編 小鮮の食嗜ハ迄水の即吟これも階の宇佐見京孝ハ幸府のかり寝夢のゆゝ多ハ幻の譚ハ始り現のゆゝ夢中の音遇の半ハて 十五編 心筑紫の夢覚ハ恋の信涙で灌ぐ袖の湊ハ管絃講香炉節ハ死て宝笛本ハかゝり歓われハ又悲ハ式部ハ究の談ハ終る

むらさきのうしの中
紫野やきそひ祭
根源賣
拾二編
仙果化
國貞画